

日時 : 6月30日(日) 9:00~10:00  
会場 : 3階 303・304  
配信方法 : Zoom ミーディング

#### 座 長

三枝 智宏 浜松市国民健康保険佐久間病院 病院長  
榛葉 誠 新城市民病院 副院長

#### 演 者

後藤 忠雄 地域医療連携推進法人県北西部地域医療ネット 代表理事/  
県北西部地域医療センター国保白鳥病院 センター長兼院長補佐/  
自治医科大学地域医療学センター地域医療支援部門 教授  
丹羽 治男 豊根村診療所 所長

#### 概 要

2025年以降の医療需要の増大に向けて、国は地域医療構想を推進している。一方、多くのへき地では、人口・医療需要はピークを越え、患者の減少や医療の担い手の不足から、ダウンサイジング・集約化・連携などの医療の再編が避けられない。医療の縮小が地域住民に与える影響は大きく、それぞれの参加者の合意を得ながら再編を進めることは時に困難である。本セッションでは、先行する地域でのダウンサイジングの事例を紹介していただき、へき地での医療の再編の現状と課題について考える。

## 小さくするだけじゃあねえ、広域ネットワークが一法？

後藤 忠雄

地域医療連携推進法人県北西部地域医療ネット代表理事/県北西部地域医療センター国保白鳥病院 センター長  
兼院長補佐/自治医科大学地域医療学センター地域医療支援部門 教授

事例1：開設52年の小規模病院、中山間地域に位置し一般病床30床、常勤医3名、老健27床および保健福祉歯科総合施設併設、なおこの地域に設置されている保健医療福祉介護施設としては、これ以外にヘルパー事業を行っている事業所のみ。開設時人口3,996人、事例検討時人口2,211人（高齢化率36%）。入院・外来患者数とも激減し、医業収支比率は悪化の一途、事例検討年の3年前には近隣7か町村と対等合併し、旧村時代の面積100平方キロメートルから合併市は1,000平方キロメートルに、人口は合併市47,144人（高齢化率29%）。保健医療介護施設は病院5か所、診療所21か所、歯科診療所14か所、調剤薬局24か所、訪問看護実施施設6か所（うちステーション3か所）、老健3か所、特養4か所、デイケア6か所、デイサービス14か所、グループホーム5か所、小規模多機能2か所、特定施設3か所、ケアハウス1か所、養護老人ホーム1か所など。ただし本事例の小規模病院の立地する地域と合併市中心までは車で30分、この間に医療介護施設なし、かつ日光いろは坂のミニチュア版のような峠あり。さて、あなたならこの小規模病院どうしますか？

事例2：開設62年の小規模病院、合併市の北部地域に位置し一般病床60床、結核病床4床、常勤医師6名（内科2、外科2、小児1、整形1、平均年齢61歳）、デイケア、居宅介護支援事業所、訪問看護、訪問介護、透析センター、健康サポートセンター（健診事業主）併設。人口減少もあって入院患者数も外来患者数も減少傾向、介護サービス施設を併設しているものの訪問診療件数も10件/月程度。合併市内の保健医療福祉施設は事例1参照。なお、直線距離にして400m程度、徒歩10分圏内に一般病床100床、療養病床50床の民間病院あり（この民間病院法人内に特養、老健、デイケア、健診センターあり）。事例検討時にはこの小規模病院の院長の定年退職が1年後に迫っていたが、今まで院長を出していた地元大学から後任を出すことは難しいとのことで院長確保困難（他の医師も高齢化かつ院長はやりたくない）、ただし市としては存続方針を打ち出しており、医師確保、民間医療機関との相互補完的關係、地域医療構想をはじめとする医療政策との整合性などが必要。さて、あなたならこの小規模病院どうしますか？

という2事例において実際どのように対応したか提示したいと思います。

### 【略歴】

- 1989年 自治医科大学卒業（岐阜12期）
- 1989年 岐阜県立下呂温泉病院
- 1991年 和良村国保病院
- 1996年 自治医科大学地域医療学助手
- 1998年 和良村国保病院副院長
- 1999年 和良村国保病院院長 兼 和良村介護老人保健施設施設長
- 2000年 (兼ねて)和良村保健福祉総合施設長
- 2004年 (町村合併に伴い)郡上市国保和良病院院長・和良介護老人保健施設施設長
- 2007年 (病院の診療所化に伴い)郡上市国保和良診療所長・和良介護老人保健施設施設長
- 2008年 (組織改変に伴い)郡上市地域医療センターセンター長 兼 郡上市地域医療センター国保和良診療所長  
兼 郡上市地域医療センター和良介護老人保健施設施設長
- 2015年 県北西部地域医療センターセンター長 兼 県北西部地域医療センター国保白鳥病院院長 兼 郡上市健康福祉部参与
- 2020年 (兼ねて)地域医療連携推進法人県北西部地域医療ネット代表理事
- 2024年 県北西部地域医療センターセンター長 兼 県北西部地域医療センター国保白鳥病院院長補佐 兼 郡上市健康福祉部参与  
(兼ねて)自治医科大学地域医療学センター地域医療支援部門教授

## 東栄病院の診療所化

丹羽 治男

豊根村診療所 所長

東栄町は愛知県北東部の県境の山間部に位置し、東には佐久間病院のある静岡県天竜区と接している。診療所の歴史は昭和20年代の三輪村国保長岡診療所に遡る。昭和36年、増床により東栄町国民健康保険東栄病院となった。昭和48年、現存する建物ができて70床となっている。昭和55年に自治医科大学卒医師の派遣が始まった。県境をまたぎ一万人程度の背景人口を抱えて、年間100人以上の出産を取り扱い、全身麻酔下での消化器外科手術、人工股関節置換術を行う時もあった。常勤医の高齢化、退職が進む中、病院を取り巻く環境が大きく変化し経営状態も厳しくなっていた。平成15年、夏目忠医師が院長に就任し経営改革を実施、平成18年度には医業収支がほぼ均衡するまでに改善した。

しかし平成15年以降町の方針で新規採用、医療機器の更新が中止となり、さらには急速な人口減少が続いたことから、さらなる改革に向けて平成19年に公設民営化された。若手職員の待遇改善を主に人材確保に努めたが、夜間の看護体制の維持困難な状況に対し、平成22年、介護療養病棟の老人保健施設へ転換を皮切りに、撤退戦に突入した。平成28年にはその老人保健施設を廃止し、一般床40床のみとした。診療所化を見据えて平成30年に再度の公設民営化を行い、平成31年、有床診療所となり、名称を東栄医療センターと変えて救急告示を返上した。令和4年11月、三輪地区を離れ現所在地に移転、無床の東栄町国民健康保険東栄診療所として再出発を果たした。

病院縮小に関連する要因として第一に看護師確保が挙げられる。しかし急速な人口減少と労働人口の減少、県からの自治医科大学卒業生の派遣、町からの繰入れ、東栄町の将来像、周辺医療機関との関連、老人の生活環境と家族との関係性の変化、地域住民の医療(機関)との向き合い方、自治体の行政処理能力、首長の役場運営方針の変化と病院との関係、議会との関係、常勤医の体力の限界、さらには今時の老人や若者の考え方の変化、介護保険制度と地域包括ケアの根本的な問題、30年後の地域、50年後の日本の姿と多くのことを考え合わせる必要があった。

管理者として個々の専門家に意見を求めることができても包括的に相談することは叶わず、大きな圧力と孤独を感じた。やるからには質と継続性を担保する必要があるが、今となれば病院はなくても何とかなるもんだとわかる。

## 【略歴】

- 1967年 愛知県名古屋生まれ
- 1986年 愛知県立千種高等学校卒業
- 1992年 自治医科大学医学部卒業
- 1992年 名古屋第一赤十字病院
- 1994年 東栄町国民健康保険東栄病院 内科
- 1997年 名古屋第一赤十字病院 消化器科
- 1999年 東栄町国民健康保険東栄病院 内科・公衆衛生科 医長
- 2003年 東栄町国民健康保険東栄病院 副院長
- 2010年 東栄町国民健康保険東栄病院 院長  
(2010年6月～2018年3月 社会医療法人財団せせらぎ会 理事長)
- 2019年 東栄医療センター センター長 (診療所化に伴う名称変更)
- 2022年 豊根村診療所 所長